

研究論文

青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係¹⁾²⁾

— 同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差, 学年差の検討 —

牧 野 幸 志

The Communication Skills and Friendship in Adolescence

— The Sex and Grade Differences of Communication Skills for Friends of the Same and Opposite Sex —

Koshi MAKINO

【要 約】本研究では, 第 1 に, 同性友人, 異性友人に対するコミュニケーション・スキル(以下, CS と表記)尺度を作成する。次に, その尺度を使用して青年期の CS が性別, 学年により異なるかを調査する。さらに, CS により友人関係の特徴や満足度が異なるかを検討する。調査参加者は大阪府内の私立大学(共学)に通う大学生 160 名(男性 103 名, 女性 57 名, 平均年齢 19.34 歳)であった。

因子分析の結果, 同性友人に対する CS, 異性友人に対する CS とともに 5 因子が抽出された。それらは, 自己表現スキル, 状況判断スキル, 会話スキル, 葛藤解決スキル, 関係構築スキルであった。各 CS の 5 因子に対して性別(男性, 女性)×学年(1 年生, 2 年生, 3 年生)の 2 要因分散分析を行なった。その結果, 同性友人 CS では, 状況判断スキルは, 女性のほうが男性よりも高く, 1 年生よりも 3 年生が高かった。また, 会話スキルは, 1 年生よりも 3 年生が高かった。他方, 異性友人 CS では, 関係構築スキルは, 1 年生よりも 2, 3 年生のほうが高かった。次に, 同性友人 CS と友人関係との関連を検討したところ, 同性友人間で状況を判断するスキルが高い人ほど, 同性友人に気を使っていることが明らかとなった。また, 同性友人 CS と異性友人 CS のすべての因子が友人関係満足度と正の相関がみられた。友人に対する CS が高い人ほど, 現在の友人関係に満足していた。

キーワード : コミュニケーション・スキル, 友人関係, 青年期, 同性友人, 異性友人

¹⁾ 本研究は, 平成23-27年度科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号23530933, 研究代表者 牧野幸志)の助成を受けて行われた。

²⁾ 本研究の一部は, 日本社会心理学会第53回大会で発表された。

1. 問題

1.1. 青年期における友人関係

青年期において友人関係は、重要な人間関係である。青年期は心理的離乳の時期でもあり、青年は親への依存的関係から離れ、青年にとって頼りになる存在や心を打ち明ける存在は同世代の友人へと移行してくる。親子関係が保護されていたり、一方的に守られている関係であるのに対し、友人関係は対等な人間関係である。では、現代において青年はどのような友人関係を形成しているのだろうか。現代の中高生や大学生において、重要なサポート源として、同世代の友人があげられることが多い(牧野, 2009; 和田, 1998)。つまり、青年期には、自分が何らかの有形無形の援助を必要とするときには、周りの友人から支援を受けている。また、大学生は悩みがあるときに相談する相手として、友人を選択することが多いことが報告されている(牧野, 2011b)。しかし、その一方で、現代では、友人関係の希薄化も指摘されており(松井, 1990)、親密な友人関係を築くのが難しい状況ともいわれている。幼児期、児童期には、比較的容易に遊び相手として友人関係を形成してきたが、年齢が増すに連れて関係が深まり、つきあい方は複雑となる(落合・佐藤, 1996)。また、小学校高学年や中学校では、友人関係を構築するのさえも難しい児童、生徒もみられる。さらに、友人関係を構築することができたとしても、その後、友人間で対人葛藤が起こったり、お互いに傷つけあうこともある。友人との葛藤や友人関係崩壊により、青年期の精神的健康に大きな影響があることも指摘されている(和田, 1998)。

このように、青年期において友人関係はその関係がうまく形成、維持されれば、重要なサポート源となり、社会集団を形成するものであるが、その関係が形成されなかったりその関係が悪化した場合には、対人関係の大きな問題となりストレスの原因となる。したがって、心理学の分野では、これまで友人関係に関する数多くの研究がなされてきた。例えば、女子青年では、生活で最も気にしていることは仲間・友人のことであり(菅原, 1979)、教育相談においても、友人関係や友人グループの相談が多くみられる(佐藤, 1995)。また、天野(1985)は、女子高生の友情は男子に比べて深く濃厚であるため、かえって長続きしにくいと、男女の友情の差を述べている。ところが、これまで先行研究は、友人関係の重要性を指摘したり、個人特性と友人関係との関連をみたり、現代青年の友人関係の現状を示すものが多かった。どのようにすれば良好な友人関係が形成できるのか、どのようにすればその関係が維持できるのか、崩壊を防げるのかなどの友人関係に直接的な影響を与える要因についての実践的な研究はあまり行なわれてきていない。

1.2. 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係

日本においては、依然として多くの小・中学校でいじめや不登校が大きな問題となっている。また、近年、高校や大学などにおいても友人ができなかったり、集団や学校への不適応が社会的な問題となっている。中学校の生徒たちが学校になじめなかったり、友人と仲良くなれない原因の1つとしてコミュニケーション・スキルの不足が挙げられる(牧野, 2009)。周りの友人とうまくコミュニケーションがとれないことによりからかひやいじめの対象となったり、コミュニケーションが取りにくいために、クラスに溶け込めず、不登校となることも少なくない。このように、コミュニケーションがうまくとれないという個人に対して、これまで、社会心理学の分野では、社会的スキル訓練によるアプローチが行なわれてきた。例えば、相川(2000a)は、シャイネスをもつ大学生に対して、ソーシャル・スキル訓練を行なった。その結果、訓練後に、大学生のシャイネスが低減していた。また、相川(1999)は、孤独感の高い大学生に実験室において社会的スキル訓練を行なった。その結果、訓練後には大学生の孤独感が低下していた。さらに、大坊・栗林・中野(2000)は、大学生の男女に講義の一環としてソーシャル・スキル訓練を行なった。毎回異なるプログラムを組み、1学期間実施した。その結果、訓練後には、参加者は非言語的な表現力、解読の感受性、他人への配慮、周囲に気を配り、自分を抑えることができるようになっていた。

近年、社会心理学の分野においては、社会的スキルよりもより具体的であり、直接的な言語・非言語的コミュニケーションを意味するコミュニケーション・スキルの重要性が指摘されている(大坊, 2006; 藤本・大坊, 2007)。牧野(2009, 2010a, 2010b, 2011a)は、コミュニケーション・スキルを「日常生活において対人関係を円滑にするために必要かつ適切な直接的技術とその知識」と定義して研究を進めている。牧野(2009)は、主に友人に対するコミュニケーション・スキル尺度を作成し、その信頼性と妥当性を確認した。その後、現役の中学生に対して、1回限りのコミュニケーション・スキル訓練を実施した(牧野, 2010b)。その結果、1日6時間の訓練プログラム実施後、中学生の会話スキル、関係構築スキルは、上昇していた。また、牧野(2011a)では、スキル訓練後に、訓練参加者の否定的気分は低減されていたが、自己評価(自己効力感、自尊感情)には変化がみられなかった。牧野(2009, 2010a, 2010b, 2011a)では、コミュニケーション・スキルと友人関係との関連は検討されていない。また、飯田(2003)は、中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連を調べている。その結果、中学生において、同輩に対するコミュニケーション・スキルが非常に重要であることを指摘している。

1.3. 先行研究の問題点と本研究の目的

青年期の友人関係とコミュニケーション・スキルに関する先行研究には考慮すべき問題がいくつかある。まず、第1に、友人関係の構築、維持に必要な要因の検討があまりなされていないということである。従来の研究では、小学生、中学生を対象として、性格などの個人特性と友人関係との関連をみた研究や各年代の友人関係の特徴を学年差、性差により示した研究が多い。今後、良好な友人関係を構築、維持するための要因を特定し、それらの能力や技術を向上させる研究が求められているだろう。第2に、青年期における友人関係の検討の際には、同性友人と異性友人が区別されていない。これまで、小学生や中学生を対象とした友人関係の調査研究においては、友人の性別は区別されていない(堂野, 2010; 廣岡・廣岡, 2004; 飯田, 2003; 牧野, 2009, 2010a, 2010b)。調査対象が小学生である場合には、小学生が“友だち”と言われて想起するのは、同性友人か性別が区別されていないかのどちらかであろう。しかしながら、高校生以上になれば、同性友人、異性友人、恋人の認知は異なってくるであろう。実際、大学生においては性別を区別した友人研究が行なわれている(和田, 1993)。特に、青年期後期においては、同性友人と異性友人ではそのかかわり方や役割が異なってくると考えられる。また、異性友人はその後、恋人への発展も考えられるため、関係の構築、維持に同性友人と異なる過程が現れるであろう。

以上のことから、本研究では、青年期の友人関係の構築、維持に影響を与えると考えられる要因の中から、近年注目されているコミュニケーション・スキルを取り上げ、それらのスキルが友人関係に与える影響を検討する。その際に、コミュニケーション・スキルを、同性友人に対するスキルと異性友人に対するスキルを区別して測定する。本研究では、同性友人、異性友人の認知が明確に分かれていると思われる大学生を調査対象とする。本研究で、どのようなコミュニケーション・スキルが友人関係を良好にするのか、同性友人と異性友人に対するコミュニケーション・スキルがどのように異なるのかなどが明らかになれば、将来的に、学校現場での友人関係とコミュニケーション・スキルに関する問題に対して解決の手がかりを与えることが可能になるとと思われる。

本研究を含む一連の研究の最終目的は、青年期を対象とするコミュニケーション・スキル訓練を開発し、実施することにより、いじめや学校不適応などの問題が発生することを予防することである。この目的を達成するためにいくつかの研究を継続して進める。本研究の第1の目的は、同性友人と異性友人を区別して、コミュニケーション・スキル尺度を作成することである。第2に、同性友人、異性友人に対するコミュニケーション・スキルの各スキルが性別、学年により異なるかを検討する。第3に、同性友人、異性友人へのコミュニケーション・スキルと友人関係の特徴、友人関係満足度との関連を検討することである。

2. 方法

2.1. 調査手続きと調査参加者

2012年(平成24年)4月に大阪府内の私立大学にて集合調査を行なった。調査は「大学生の日常生活に関するアンケート」という形で、無記名式で行なわれた。調査に要した時間は配布、回収を含めて約20分間であった。

調査参加者 調査参加者は大阪府内の私立大学(共学)に通う大学生160名(男性103名,女性57名,平均年齢19.34歳,年齢幅18~26歳,1年生54名,2年生40名,3年生61名,4年生5名)であった。男女の内訳などの詳細はTable 1参照。ただし,欠損値があるため分析により人数が異なる。

Table 1 調査参加者の内訳

	男性	女性	合計
大学1年生	38	16	54
大学2年生	20	20	40
大学3年生	42	19	61
大学4年生	3	2	5
合計	103	57	160

(人)

2.2. 質問紙の構成

同性友人に対するコミュニケーション・スキル尺度(同性CS尺度) 主に学校での同性友人とのコミュニケーションとそのスキルに関する22項目(牧野(2009)のCS尺度を同性友人に限定して再構成したもの),「まったくあてはまらない」~「よくあてはまる」の4段階評定(得点範囲1~4),得点が高いほど同性友人に対してのコミュニケーション・スキルが高いことを示す。

異性友人に対するコミュニケーション・スキル尺度(異性CS尺度) 主に学校での異性友人とのコミュニケーションとそのスキルに関する22項目(牧野(2009)のCS尺度を異性友人(恋人は含まない)に限定して再構成したもの),「まったくあてはまらない」~「よくあてはまる」の4段階評定(得点範囲1~4),得点が高いほど異性友人に対してのコミュニケーション・スキルが高いことを示す。項目内容は,同性CS尺度と同じ。

同性友人関係尺度 岡田(1995)による友人関係尺度を同性の友達に限定して使用した。この尺度は,青年期の友人関係の特徴を測定する尺度(17項目)である。3つの下位尺度に分かれており,1つ目は友人に気を遣いながら関わる「気遣い」尺度,2つ目は深いかかわりを避けてお互いの領域を侵さない「ふれあい回避」尺度,3つ目は集団でいることを志向する「群れ」尺度である。「まったくあてはまらない」~「よくあてはまる」の4段階評定(得点範囲1~4),得点が高いほど該当項目の程度が高いことを示す。

友人関係満足度 加藤(2001)による友人関係満足度を使用。友人関係の満足度に関する6項目(1因子構造),「まったくあてはまらない」~「よくあてはまる」の5段階評定(得点範囲1~5),得点が高いほど現在の友人関係(同性異性どちらも含む)に満足していることを示す。

3. 結果

3.1. 同性・異性コミュニケーション・スキル尺度(同性CS尺度・異性CS尺度)の因子構造

同性友人へのコミュニケーション・スキルに関する22項目の評定値に対して因子分析を行なった。固有値1を基準とする因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行なった結果, 5因子構造ととらえた。その構造は, 中学生のコミュニケーション・スキルを測定した牧野(2009)とほぼ同様であった。第1因子は“同性の友だちと違う意見でも, 相手にはっきり伝えられる。”, “同性の友だちに自分の考えを伝えたいとき, きちんと表現できる。”など自分の気持ちや意見を同性の友人に表現する項目に負荷が高かった。したがって, これらを「自己表現スキル」因子とした。そして, 「自己表現スキル」を示す4項目($\alpha=.721$)の平均を「自己表現スキル」得点として算出した(1~4点, 得点が高いほど, 自己表現スキルが高いことを示す)。第2因子は“同性の友だちの立場になって考えてみるができる。”, “同性の友だちがどのような気持ちなのか, 顔や態度でわかる。”など6項目に負荷が高かった。これらは, 同性友人がどのような立場にあるかを考え, 今自分に何が求められているかという状況を判断するスキルと捉えられたので「状況判断スキル」因子と命名した。これら6項目($\alpha=.713$)の平均を「状況判断スキル」得点として算出した(1~4点, 得点が高いほど, 状況判断スキルが高いことを示す)。第3因子は“同性の友だちと楽しく話す話題がたくさんある。”, “同性の友だちと話していて, あまり会話が途切れないほうである。”など同性友人との会話に関する項目に負荷が高かったため, 「会話スキル」因子とした。これら「会話スキル」に関する3項目($\alpha=.723$)の平均値を「会話スキル」得点として算出した(1~4点, 得点が高いほど, 会話スキルが高いことを示す)。第4因子は“気まずいことがあった同性の友だちと, うまく仲直りできる。”, “仲のよい同性の友だちがけんかしているとき, どうしたらいいかわかる。”など同性友人との間の喧嘩などの葛藤を解決するスキル項目に負荷が高かった。したがって, これらを「葛藤解決スキル」因子とした。そして, 「葛藤解決スキル」を示す3項目($\alpha=.506$)の平均を「葛藤解決スキル」得点として算出した(1~4点, 得点が高いほど, 葛藤解決スキルが高いことを示す)。最後に, 第5因子は“はじめて会う同性の人に, 自己紹介がうまくできる。”, “あまりよく知らない同性の友だちとでも, すぐに会話が始められる。”の4項目に負荷が高かった。これらは, 初対面の人との関係を始める, あるいはあまりよく知らない人との関係構築に必要なスキルと捉えられたので「関係構築スキル」因子と命名した。これら4項目($\alpha=.828$)の平均を「関係構築スキル」得点として算出した(1~4点, 得点が高いほど, 関係構築スキルが高いことを示す)。

次に, 異性友人へのコミュニケーション・スキルに関する22項目の評定値に対して因子分析を行なった。固有値1を基準とする因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行なった結果, 5因子構造ととらえた。その構造は, 同性友人へのコミュニケーション・スキルの因子構造とほぼ同様であったので, 同じ項目を使用して5つの因子得点を算出した。それぞれの, 信頼性は, 異性友人への自己表現スキル $\alpha=.797$, 状況判断スキル $\alpha=.804$, 会話スキル $\alpha=.827$, 葛藤解決スキル $\alpha=.721$, 関係構築スキル $\alpha=.887$ といずれも高かった。両コミュニケーション・スキル尺度ともに下位尺度の信頼性は高かった。

3.2. 大学生の同性友人コミュニケーション・スキルの性差と学年差

同性友人へのコミュニケーション・スキルの各因子が性別と学年により異なるかを検討した。分析は、性別(男性・女性)×学年(1年生, 2年生, 3年生)の2要因分散分析(いずれも被験者間要因)で行なった。4年生の大学生は全体で5人と少数であったので分析対象外とした。従属変数は、同性友人へのコミュニケーション・スキルの5つの因子得点であった。

自己表現スキル 同性友人への自己表現スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 2 参照)。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった(それぞれ、 $F(1, 149)=0.28, n.s., F(2, 149)=0.84, n.s., F(2, 149)=0.34, n.s.$)。自己表現スキルに性差はみられず、学年によっても差はなかった。全体の平均値は2.88と比較的高かった。

状況判断スキル 同性友人への状況判断スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 3 参照)。その結果、性別の主効果、学年の主効果が有意であった(それぞれ、 $F(1, 149)=5.11, p < .05, F(2, 149)=3.10, p < .05$)。同性友人への状況判断スキルは、男性($M=3.20$)よりも女性($M=3.36$)高く、1年生($M=3.18$)よりも3年生($M=3.39$)のほうが高かった。

Table 2 性別と学年による同性友人への自己表現スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
	男性		2.77 (0.09)	3.03 (0.13)
女性		2.81 (0.14)	2.86 (0.13)	2.90 (0.13)

評定値は、1～4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

Table 3 性別と学年による同性友人への状況判断スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
	男性		3.04 (0.07)	3.21 (0.09)
女性		3.32 (0.10)	3.33 (0.09)	3.42 (0.09)

評定値は、1～4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

会話スキル 同性友人への会話スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 4 参照)。その結果、学年の主効果が有意であった($F(2, 149)=4.02, p < .05$)。下位検定の結果、1年生($M=2.63$)よりも3年生($M=3.00$)のほうが高かった。

葛藤解決スキル 同性友人への葛藤解決スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 5 参照)。その結果、学年の主効果に有意傾向がみられた($F(2, 149)=2.35, p < .10$)。1年生($M=2.39$)よりも3年生($M=2.62$)のほうが高い傾向がみられた。

関係構築スキル 同性友人への関係構築スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 6 参照)。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった(それぞれ、 $F(1, 149)=0.50, n.s., F(2, 149)=0.40, n.s., F(2, 149)=1.18, n.s.$)。同性友人への関係構築スキルに性差はみられず、学年によっても差はなかった。全体の平均値は2.52であった。

Table 4 性別と学年による同性友人への会話スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
	男性		2.61 (0.10)	2.87 (0.14)
女性		2.65 (0.16)	2.83 (0.14)	2.93 (0.15)

評定値は、1~4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

Table 5 性別と学年による同性友人への葛藤解決スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
	男性		2.38 (0.10)	2.63 (0.13)
女性		2.40 (0.15)	2.53 (0.13)	2.65 (0.13)

評定値は、1~4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

Table 6 性別と学年による同性友人への関係構築スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
	男性		2.44 (0.11)	2.35 (0.16)
女性		2.50 (0.18)	2.66 (0.16)	2.51 (0.16)

評定値は、1～4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

3.3. 大学生の異性友人コミュニケーション・スキルの性差と学年差

異性友人へのコミュニケーション・スキルの各因子が性別と学年により異なるかを検討した。分析は、性別(男性・女性)×学年(1年生, 2年生, 3年生)の2要因分散分析(いずれも被験者間要因)で行なった。4年生の大学生は全体で5人と少数であったので分析対象外とした。従属変数は、異性友人へのコミュニケーション・スキルの5つの因子得点であった。

自己表現スキル 異性友人への自己表現スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 7 参照)。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった(それぞれ、 $F(1, 149)=2.64, n.s., F(2, 149)=0.19, n.s., F(2, 149)=1.30, n.s.$)。自己表現スキルに性差はみられず、学年によっても差はなかった。全体の平均値は2.59であった。

状況判断スキル 異性友人への状況判断スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 8 参照)。その結果、主効果、交互作用ともに有意な差はみられなかった(それぞれ、 $F(1, 149)=0.07, n.s., F(2, 149)=1.85, n.s., F(2, 149)=0.46, n.s.$)。状況判断スキルに性差はみられず、学年によっても差はなかった。全体の平均値は2.89と比較的高かった。

Table 7 性別と学年による異性友人への自己表現スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
	男性		2.40 (0.11)	2.46 (0.15)
女性		2.69 (0.17)	2.80 (0.15)	2.57 (0.15)

評定値は、1～4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

Table 8 性別と学年による異性友人への状況判断スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
	男性		2.75 (0.09)	2.85 (0.13)
女性		2.79 (0.14)	2.98 (0.13)	2.94 (0.13)

評定値は、1～4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

会話スキル 異性友人への会話スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 9 参照)。その結果、学年の主効果に有意傾向がみられた($F(2, 149)=2.95, p<.10$)。1年生($M=2.10$)よりも2年生($M=2.49$)のほうが高い傾向がみられた。

葛藤解決スキル 異性友人への葛藤解決スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 10 参照)。その結果、学年の主効果に有意傾向がみられた($F(2, 149)=2.79, p<.10$)。1年生($M=1.90$)よりも2年生($M=2.25$)のほうが高い傾向がみられた。

関係構築スキル 異性友人への関係構築スキル得点に対して、性別と学年の2要因分散分析を行なった(Table 11 参照)。その結果、学年の主効果が有意であった($F(2, 149)=3.46, p<.05$)。下位検定の結果、1年生($M=1.92$)よりも2年生($M=2.29$)、3年生($M=2.27$)のほうが高かった。

Table 9 性別と学年による異性友人への会話スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
	男性		2.06 (0.12)	2.43 (0.17)
女性		2.15 (0.19)	2.55 (0.17)	2.26 (0.17)

評定値は、1～4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係

Table 10 性別と学年による異性友人への葛藤解決スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
男性		1.99 (0.11)	2.27 (0.15)	2.06 (0.11)
	女性	1.81 (0.17)	2.23 (0.15)	2.16 (0.16)

評定値は、1～4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

Table 11 性別と学年による異性友人への関係構築スキルの差異

性別	学年	1年生	2年生	3年生
男性		1.96 (0.12)	2.20 (0.17)	2.28 (0.12)
	女性	1.88 (0.19)	2.39 (0.17)	2.26 (0.18)

評定値は、1～4点の得点を取りうる。()内は標準偏差

3.4. コミュニケーション・スキルと友人関係との関連

3.4.1. 同性友人へのコミュニケーション・スキルと同性友人関係尺度との関連

同性友人へのコミュニケーション・スキルの5因子と友人関係尺度(3尺度)との相関関係を検討した(Table 12 参照)。その結果, 同性友人への状況判断スキルと気遣い尺度との間に, 弱い正の相関がみられた。同性友人に対して状況判断をするコミュニケーション・スキルが高い人ほど, 同性友人に気を使っていた。また, 同性友人への自己表現スキル, 状況判断スキル, 葛藤解決スキル, 関係構築スキルは, 群れ尺度と弱い正の相関, 同性友人への会話スキルは群れ尺度と比較的強い正の相関がみられた。同性友人へのコミュニケーション・スキルが高い人ほど, 集団で行動する志向性が高かった。

3.4.2. 同性・異性友人へのコミュニケーション・スキルと友人関係満足度との関連

同性・異性友人へのコミュニケーション・スキルの5因子と現在の友人関係への満足度との相関関係を検討した(Table 13 参照)。その結果, 同性友人への自己表現スキル, 葛藤解決スキル, 関係構築スキルは, 友人関係満足度と弱い正の相関, 同性友人への状況判断スキルと会話スキルは友人関係満足度と比較的強い正の相関がみられた。同性友人へのコミュニケーション・スキルが高い人ほど, 現在の友人関係に満足している。また, 異性友人に対するすべてのコミュニケーション・スキルが友人関係満足度と弱い正の相関がみられた。異性友人へのコミュニケーション・スキルが高い人ほど, 友人関係に満足している。

Table 12 同性友人CSと友人関係尺度との相関関係

同性友人関係尺度	同性友人CS尺度				
	自己表現	状況判断	会話	葛藤解決	関係構築
気遣い尺度	.052	.207 **	.027	.119	.116
ふれあい回避尺度	-.021	-.120	-.105	.100	.101
群れ尺度	.340 **	.355 **	.440 **	.277 **	.359 **

注) 表内の数値は相関係数

$N = 160$, ** $p < .01$

Table 13 同性・異性友人CSと友人関係満足度との相関関係

	同性友人CS尺度				
	自己表現	状況判断	会話	葛藤解決	関係構築
友人関係満足度	.358 **	.456 **	.454 **	.337 **	.380 **
	異性友人CS尺度				
	自己表現	状況判断	会話	葛藤解決	関係構築
友人関係満足度	.349 **	.298 **	.341 **	.238 **	.277 **

注) 表内の数値は相関係数

$N = 160$, ** $p < .01$

4. 考 察

本研究の第1の目的は、同性友人と異性友人を区別して、コミュニケーション・スキル尺度を作成し、その構造を調べることであった。第2の目的は、同性友人、異性友人に対するコミュニケーション・スキルの各スキルが性別、学年により異なるかを検討することであった。第3の目的は、同性友人、異性友人へのコミュニケーション・スキルと友人関係の特徴、友人関係満足度との関連を検討することであった。

4.1. 同性友人・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの構造

本研究では、まず、大学生を対象とし、同性友人と異性友人を区別して、友人に対するコミュニケーション・スキルを測定する尺度を作成した。牧野(2009)で使用したコミュニケーション・スキル尺度を参考に同性友人を対象としたコミュニケーション・スキル尺度項目と異性友人を対象としたコミュニケーション・スキル尺度項目を作成した。それらの項目への回答に対して因子分析を行なった。その結果、両コミュニケーション・スキルにおいて、牧野(2009)とほぼ同様の5因子を抽出した。

第1因子は、自分の意見を相手に伝えることができるというアサーティブなスキルである自己表現スキルであった。第2因子は、相手の立場になって考えたり、周りはどのような状況であるかを判断することができるという状況判断スキルであった。このスキルは、コミュニケーションを円滑に進めるために必要である。第3因子は、友だちと話す話題があることや会話が途切れないほうであるなどの会話スキルであった。多くの場合、コミュニケーションには言語が用いられる。したがって、話題があり、会話が上手であるなどのスキルはコミュニケーションを促進するであろう。会話スキルは、これまでのソーシャル・スキル研究で取り上げられることが少なかった(相川, 2000b)。これまでのソーシャル・スキル研究は非言語的コミュニケーションに関するものが多かった(相川, 2000b)。したがって、本研究において会話スキルが取り上げられたことは価値のあることであろう。

第4因子は、友人と意見があわなかったり、友人との間で喧嘩などの葛藤を経験した場合に、関係を悪くすることなく、問題にどのように対処することができるという葛藤解決スキルであった。人間関係において、苦手な人ともつきあっていく、また、関係を修復していく技術も非常に重要であろう。最後に、第5因子は、関係構築スキルであった。これは、初めて会う人に自己紹介ができる、あまりよく知らない友だちとでもすぐに会話が始められるなど初対面やあまり知らない人と関係を作る技術であった。人間関係を始めるうえで重要なスキルである。

全般的に見ると、同性友人CSにおいては、5つのスキルの中で状況判断スキルが比較的高かった(状況判断スキルの全体の平均値は3.27)。つまり、大学生は、同性の友人間では、周りの状況をよく判断できているということであろう。他方、葛藤解決スキルと関係構築スキルの平均値は比較的低かった(いずれも全体の平均値は2.54)。同性間であっても初対面の人と話すことやあまり知らない人と話すということは容易なことではないということ、また、友人との間に葛藤が生じたときにそれを解決する技術はなかなか身につけていないことが明らかとなった。また、異性友人CSにおいても、同様の傾向がみられた。状況判断スキルが比較的高く(状況判

断スキルの全体の平均値は 2.92), 葛藤解決スキルと関係構築スキルの平均値は比較的低かった(全体の平均値は, 葛藤解決スキル 2.10, 関係構築スキル 2.19)。作成した同性友人・異性友人へのコミュニケーション・スキル尺度の信頼性を検討した結果, いずれの下位尺度の信頼性係数も高かった。したがって, 今回, 作成した同性友人・異性友人に対するコミュニケーション・スキル尺度の精度は高いといえるだろう。

4.2. 同性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差と学年差

同性友人に対するコミュニケーション・スキルの各スキルは性別, 学年により違いがみられたものもあった。自己表現スキル, 関係構築のスキルは性別, 学年による差はみられなかった。どちらのスキルの平均値も比較的高く, 大学生は同性友人に対しては, 自分の伝えたいことを表現でき, 初対面の相手にもコミュニケーションを取ることができているようである。この結果は, 中学生を対象とした牧野(2009)とも同様であった。自己表現スキルは, ソーシャル・スキルの中の「自己を主張するスキル」とほぼ同じ概念であり, 大学生の同性友人間においても大事なスキルといえよう。次に, 同性友人への状況判断スキルは, 性差と学年差がみられ, 男性よりも女性のほうが, 1年生よりも3年生のほうが, 高かった。女性のほうが周りの状況を読む技術が高く, その技術は大学生活において次第に身についていくと予想される。牧野(2009)においても, 状況判断スキルは女子生徒のほうが男子生徒よりも高かった。これらの結果は, おそらく, 女性がより周りの同性に気を使いながら生活していることに原因があるだろう。同性友人に対する会話スキルと葛藤解決スキルでは, 学年差とその傾向がみられた。いずれも1年生よりも3年生のほうがスキルは高かった。おそらく大学生活での相互作用で, 次第に同性の友人と会話するスキルや苦手な同性友人ともつきあうスキルが身についていくのであろう。本研究は4月に実施されたためか, 入学当初の1年生と既に大学生活を2年送っている3年生との間に, 同性に対する会話スキルと葛藤解決スキルに学年差がみられたのかもしれない。牧野(2010a)では, 大学生間の比較をしていなかったため, 大学生において一部のスキルに学年差がみられたのは興味深い。

4.3. 異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差と学年差

異性友人に対するコミュニケーション・スキルの各スキルは性別, 学年により違いがみられたものもあった。自己表現スキル, 状況判断スキルは性別, 学年による差はみられなかった。どちらのスキルの平均値も比較的高く, 大学生は異性友人に対しても, 自分の思っていることについて表現でき, 周りの状況も判断できているようである。次に, 会話スキル, 葛藤解決スキル, 関係構築スキルには, 学年差やその傾向がみられた。会話スキルと葛藤解決スキルは1年生よりも2年生のほうが, 関係構築スキルは1年生より2, 3年生のほうが高かった。このことから, 異性友人とのコミュニケーション・スキルのいくつかは, 大学入学後に大学生活の中で身につくことが予想される。特に, 大学生活において異性とコミュニケーションを取り合う中で, 異性との関係構築スキルや会話スキルが身についていくのであろう。

牧野(2009)や牧野(2010a)においては, 友人を同性友人と異性友人に区別していないため, 本

研究の結果と単純に比較することはできないが、牧野(2009)では中学生を対象としているため、調査参加者は、主に同性友人を想起していたと考えられる。牧野(2010a)の調査参加者内の大学生においても、特に指定していないため、一般的には同性友人を想起した調査参加者が多いと思われる。今回の結果のように、同性友人と異性友人に対するコミュニケーション・スキルが、性別や学年により異なることは、今後、コミュニケーション・スキル訓練などを行なう際にも想定対象を区別する必要があることを示しているだろう。特に、高校生や大学生にとっては、同性友人、異性友人、恋人の認知は明確に区別されていると思われるため、コミュニケーションの対象を区別する必要がある。

4.4. コミュニケーション・スキルと友人関係との関連

同性友人へのコミュニケーション・スキルと同性友人関係の特徴との関連を検討した。その結果、同性友人への状況判断スキルと友人への気遣い尺度との間に、弱い正の相関がみられた。つまり、同性友人との間で、周りの状況を判断するスキルが高い人ほど、同性友人に気を使っていることが明らかとなった。周りの同性の友人に気を使うために、周りの状況を的確に判断する技術が身についてきたのかもしれない。また、同性友人へのコミュニケーション・スキルのすべてが、集団でいることを好む、集団行動を楽しむ、群れ尺度と正の相関がみられた。友だちの集団へ適応しようとする、友だちとの集団行動を好むために、コミュニケーション・スキルを修得したのかもしれない。あるいは、逆に、同性友人に対するコミュニケーション・スキルが高いために、周りの友人集団に適応できているのかもしれない。

同性・異性友人へのコミュニケーション・スキルの各因子と現在の友人関係への満足度との関連を検討した。同性友人に対するすべてのコミュニケーション・スキルは、友人関係満足度と正の相関がみられた。また、異性友人に対するすべてのコミュニケーション・スキルも友人関係満足度と正の相関がみられた。同性友人、異性友人へのコミュニケーション・スキルが高い人ほど、現在の友人関係に満足していることが明らかになった。つまり、同性友人に対しても異性友人に対してもコミュニケーション・スキルが高い人ほど、友人関係に満足していた。ただし、その影響力の大きさは、同性友人へのコミュニケーション・スキルのほうが大きいようである。これらの結果は、同性、異性へのコミュニケーション・スキルが高いことで、友人関係の構築が可能となり、関係が良好に保たれることで、満足度が高まると考えられる。今後は、友人関係満足度についても、同性友人と異性友人を区別して、測定する必要があるだろう。

引用文献

- 相川 充 (1999). 孤独感の低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 社会心理学研究, **14**, 95-105.
- 相川 充 (2000a). シヤイネスの低減に及ぼす社会的スキル訓練の効果に関するケース研究 東京学芸大学紀要(第1部門教育科学), **51**, 49-59.

- 相川 充 (2000b). 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学— サイエンス社
- 天野隆夫 (1985). 女子生徒のインフォーマル・グループ アジア文化, **10**, 87-95.
- 大坊郁夫 (2006). コミュニケーション・スキルの重要性 日本労働研究雑誌, **546**, 13-22.
- 大坊郁夫・栗林克匡・中野星 (2000). 社会的スキル実習の試み 北海道心理学研究, **23**, 22.
- 堂野恵子 (2010). 児童中期・後期の友だち集団関係性が社会的スキルの発達に及ぼす効果
安田女子大学紀要, **38**, 33-42.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, **15**, 347-361.
- 廣岡雅子・廣岡秀一 (2004). 中学生のコミュニケーション能力を高めるアサーション・トレーニングの効果: 授業での実践的研究 三重大学教育学部研究紀要(教育科学), **55**, 75-90.
- 飯田順子 (2003). 中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連 学校心理学研究, **3**, 3-9.
- 加藤 司 (2001). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295-304.
- 牧野幸志 (2009). 中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発(1) — 中学生のコミュニケーション・スキル, 精神的健康の性差, 学年差の検討 — 経営情報研究, **17(1)**, 1-16.
- 牧野幸志 (2010a). 中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発(2) — 中学生と大学生のコミュニケーション・スキルの比較 — 経営情報研究, **17(2)**, 35-43.
- 牧野幸志 (2010b). 中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発(3) — 中学生に対するコミュニケーション・スキル訓練の効果 — 経営情報研究, **18(1)**, 1-9.
- 牧野幸志 (2011a). 中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発(4) — コミュニケーション・スキル訓練が自己評価に与える影響 — 経営情報研究, **18(2)**, 107-118.
- 牧野幸志 (2011b). 大学生の相談行動に関する研究(1) — 大学生の悩みと相談相手に関する基礎研究 — 日本心理臨床学会第30回秋季大会発表論文集, 445.
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能(斎藤耕二・菊池章夫編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 Pp. 283-296.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **43**, 354-363.
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, **3**, 11-20.
- 菅原真理子 (1979). 現代ヤングレディ考 —その実像と国際比較— 中央法規出版
- 和田 実 (1993). 同性友人関係: その性および性別タイプによる差異 社会心理学研究, **8**, 67-75.
- 和田 実 (1998). 大学生のストレスへの対処, およびストレス, ソーシャルサポートと精神的健康との関係—性差の検討 実験社会心理学研究, **38**, 193-201.